

(別紙4(1))

### 1 自己評価及び外部評価結果

**【事業所概要(事業所記入)】**

事業所番号	0370300196		
法人名	社会福祉法人三陸福祉会		
事業所名	認知症高齢者グループホームさんりく		
所在地	岩手県大船渡市三陸町越喜来字杉下56-4		
自己評価作成日	平成24年11月15日	評価結果市町村受理日	平成25年5月10日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kai.gokensaku.jp/03/index.php?act=on_kouhyou_detail_2012_022_kanri=true&amp;Ji_gyosyoQ=0370300196-00&amp;PrefQ=03&amp;Ver si onCd=022">http://www.kai.gokensaku.jp/03/index.php?act=on_kouhyou_detail_2012_022_kanri=true&amp;Ji_gyosyoQ=0370300196-00&amp;PrefQ=03&amp;Ver si onCd=022</a>
----------	---

**【評価機関概要(評価機関記入)】**

評価機関名	(公財)いきいき岩手支援財団
所在地	岩手県盛岡市本町通3丁目19-1 岩手県福祉総合相談センター内
訪問調査日	平成25年1月17日

**【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】**

東日本大震災により当施設も被災を受け、県や市、地域等の支援を受けながら23年9月より、仮設の施設でグループホーム事業を再開することが出来た。仮設整備した高台には、同じく震災で被害を受けた地域住民も多くおり、直ぐ前には集会所がありボランティア等において月に数回のお茶会やイベント等が開催され、そのたびに出かけるなどで地域との馴染みの関係に繋がっている。環境が変わってもこれまでと同様の地域の顔ぶれがそこにあり、地域や家族等に支えられながら、「ゆったりと、たのしく、その人らしく」を事業所理念に明るく生活を送られている。

**【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】**

当ホームは、東日本大震災時の大津波により事業所を失い、現在は高台の仮設団地内で同法人の小規模多機能型居宅介護事業所、三陸地区サポートセンター「さんそん」と隣接して運営されている。災害前とは違い不便なこともあるが、職員間の協力、法人や関係者の協力をもって運営されている。仮設団地以外の周辺地域との交流は難しいところであるが、団地内でのイベントや避難訓練、法人が運営している事業などを通じて団地内の方々と交流が行われている。職員は法人内での異動が多いが、優しさ、思いやり、愛情をもって利用者に接し、家族が見て安心出来るケアを行うことを心がけている。事業所運営理念の「その人らしく」をより深めるためにも、1日でも早く仮設を脱し、本設での事業所運営の復興を祈念するところである。

**V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します**

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価票

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I.理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	職員との話し合いで、「ゆったりと、たのしく、その人らしく」を事業所理念に掲げ、会議やミーティング時などでリーダーが理念を提唱し、介護度の進行予防など日常生活への実践に繋がるよう努めている。	隣接する小規模多機能と共通の理念を作った。以前は綺麗な言葉を並べていたが、理解するのが難しいと考え、職員、管理者等により法人の理念とは別に考えられた。日常の中で、常に「その人らしく」を意識して生活することが心がけられている。	被災による影響で、法人内の職員の異動が多く、地域密着型サービスの意義をよく理解できずに業務にあたらなければならぬ状況である。わかりやすい理念を基に、地域密着型の意義について勉強され、認識を新たにさせていただくことを望みたい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	震災前と環境は違うが、以前より多くの方が周りにいることで、散歩などで交流したり、近くに集会所があり定期的にイベント等が開かれその都度案内もあり、業務を割っても極力参加できるよう取り組んでいる。	仮設団地内に事業所があるため、同団地内の方々との交流が主となっており、団地内のイベントや散歩の際に周辺の方々との交流がある。また、団地内の組織の一員として参加しており、仮設団地内の避難訓練などに共同で参加している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	散歩などの途中、相談される時もあり、その都度応じており、また面会者等の相談には応じるが、改まった取り組みはしてない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	前年9月からサービスを再開し11月に開催しているが、今年度は整備体制が遅れ10月に行っている。内容はこれまで同様報告に留まり、サービス等向上に向けた話し合いについては今後の課題と思われる。	委員のメンバーを編成し直して、家族代表、行政、様々な地域の代表、駐在所、消防署などで構成されているが、これに地域の方や顔見知りの方を入れたいと考えている。現状では事業所の報告が主となっているため、もう一歩進んだ話し合いができるようにしたいと考えている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	震災後市とも連携し協力を仰ぎながら復興に取り組んできた。また地域ケア会議の参加で報告したり、事態の発生時には電話等で積極的に伺う等関係作りに努めている。	震災後の対応等のこともあり、頻繁に行政関係者とのやり取りが行われている。事業所の再建、再開の際には備品、物品などの調達について相談支援の協力が得られた。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	玄関からは自由に出入りできるようになっており、その都度職員が付き添って散歩や日向ぼっこなどをして、本人の赴くままに支援している。週一回はドライブ等で外出する機会を設けているが、普段は出ようとされないため、できればなるべく外に出て頂きたいところである。また資料を以って学習し拘束のないケアに努めている。	日常のケアを実践するうえで、何が身体拘束にあたるのか職員自らが気づけるようにしたいと考えている。食事の際の車椅子の固定など、目的をはっきりと持ち、不要な拘束にならないように気を付けている。今後は身体拘束に関する委員会の立ち上げを検討している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員は業務において、互いに確認したり状況判断等により虐待に至ることにならないよう取り組んでおりまた、学習会等で虐待防止について学んだりすることで意識を高く持ちながら防止に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在は活用する方もないが、学習会等でこれ等について学ぶ機会を設け、制度を活用できるように努めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時においては十分な説明を行い、改定等の際も資料を交わしながら説明をしており、それぞれ納得の上で理解に至っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族においては契約時や面会時及びケアプラン説明時などに意見や要望を聞くようにしており、またこれらを運営推進会議で回り運営に反映できるようにしているが、これまで家族等からの意見などの実例がない。	利用者の普段の生活を出来るだけ知らせて、家族からの意見要望等、可能な限り聞き取るようにしているが、現在までのところ、特に意見が出されるようなことがない。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	特に改まった機会は設けていないが、朝のミーティング時や夕方の申し送り時、また日常のスタッフ同士の何気ない会話の中から汲み取ったり、個別に意見を伺う等で段階的に上部に提案するなど、運営に反映できるようにしている。	管理者が職員の意見、考えを把握し、可能なことは実施しており、場合によっては法人の会議の際に提案することもある。災害発生後、法人全体の職員で組合を作ったことにより、組合を通じて法人に対応してもらったこともある。但し、仮設住宅での運営であるため、ある程度の不便はやむを得ないものと考えられている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	被災後は復興に躍起になっており、これまで就労していた職員の働く場所の確保に努めたり、仮設ではあるが施設を立ち上げるなどして、最低値のスタートであり設問の水準に至っていないのが現状である。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	復興に重点を置き、経費等を考慮すればおのずと予算に及ばない範囲での外部研修等は参加してもらっている。依って現段階では臨まれる形に至っていないのが現状である。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	復興の際、事務的な部分で協力してくれた施設との交流はあったが、サービスの向上に繋がるような交流は現段階では行っておらず今後の課題となる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービスを実施するに当たり、本人に数回程度の訪問等で関係づくりをし、家族にも理解してもらい契約に至っている。また利用時に当たっては家族の協力のもと、密に連携を図るなどして、利用者が安心して生活ができるよう関係づくりに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	申込時や実調時、契約時などに家族の話を良く聞いて、要望等を受け入れながら、ケアプランに反映し、家族とも連携しながら信頼関係づくりに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	個人での申し込みや居宅担当を通じて申し込みがあり、改めて本人及び家族等と綿密に話し合い、施設のサービス内容などを説明しまた、他のサービス利用も説明の上利用に至っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は日々の暮らしの中で、「その人らしく」を理念に本人の思いを尊重しながら、関係づくりに努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	「小遣いの確認票」を以って、月に一回はホームに足を運んでいただくようにしており、また日々の暮らしが分かるように「一行日誌」を月一回家族に届けて、家族と共に支えあえる関係づくりに努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	震災後1年以上が経過しているが、家族や職員も震災を受けており、いまだに目途が立たない中で生活である。そのような中で「馴染みの関係づくり」も希薄になっており、復興と共に徐々に進めていきたいと考える。	家族や近隣の方々との交流はあるが、馴染の方や家族も仮設住宅にいる場合もあるため、関係の継続には苦慮している。買物等には職員が利用者と一緒に出かけている。理容出張も行われている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	たとえば食事の席など、互いの関係がスムーズにいくよう配慮し、個々のレベルに合わせた配置をするなど支援している。また時には一人になりたくなる場面もあり、これらを受け止めながら支援に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	今年度例はないが、これまで同様事態の発生時には本人や家族へのフォローが必要であると捉えている。また契約時にも書類を以って家族に説明している。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	理念に基づいて、その方に合った望まれる生活ができるように、その都度カンファレンス等を行い、本人本位に繋がるようなケアに努めている。	利用者3人に対して職員1人の担当制をとっており、担当を通じて利用者の思いの把握に努めている。また、利用者毎に「気付きシート」を用意しており、職員全員で気付いたことを記入している。そのため、職員は常に観察し、利用者の感情に話しかけるよう心がけている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	実調時、家族等からその方の生活背景を聞きだし、これまでの本人の人生を把握しながら安心して生活できるよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	その方の能力や力量、出来ることなどを職員が把握しながら、その作業やケア等に繋がるよう努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	職員が日々の変化や気づきをシートに記入し、定期的にカンファレンスを行い、ケアプランに反映とモニタリングの実施でその方が安心して生活できるように支援している。また家族からも意見をいただくようしているが、これまで具体的な意見は見られていない。	具体的に書かれた気付きシートを基にケアプラン評価を行い、職員、ケアマネが協議して介護計画を作成している。この際、家族の意向があれば加えられている。完成した計画は家族の確認印をもらっている。状態の変化に対しては、職員全員で計画の内容を検討しており、出された意見は試してみて、採用するかどうかが検討されている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の暮らしの中で、職員が「気づく」ことを心がけ、毎日のミーティングや何気ない会話の中で話し合い、それを実践に繋げるようにしたり、また職員からの定期的な気づきシートを以って情報の共有とプランの見直しに努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人や家族等の思いや求めに応じ、事業所としてできる範囲で、家族や地域等の連携協力により柔軟な取り組みが出来るように心がけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	震災後地域資源も不足になる中で、少しずつではあるが買い物をする場所や理美容店、郵便局、金融機関等が再興をしており、そのような中で地域資源を活用しながら支援に努めている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居時全員が「かかりつけ医」をホームが指定する診療所に移しており、定期的に看てもらっている。移動困難時には往診してもらおう等、積極的に関わりを以て医療を受けられるように支援している。	基本的に、家族の了解のもとに利用開始時にホームで指定している診療所を利用することとしている。指定の診療所は事業所から近いこともあり、認知症に対する理解があるため、関係者間でのやりとりが容易になっている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	職員は日常生活の中で、入居者の状態や気づきなどを職場の看護師に報告し、他職員とも相談しながら適切な医療等を受けられるように支援している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	今年度入院の実績はないが、これまで通り入院等の場合は医師、看護師、家族等との連携で相談に努め、極力その家族等の思いを受け止め、事業所でもそれに寄り添いながら安心していただけるように努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	具体的には今年2月にホームで亡くなられた方がおり、前年10月ごろから医師や施設、家族等との話し合いでお互い納得の上看取りを行っている。	看取り指針を作成しており、個人情報の取扱いと併せて家族に説明している。過去に看取りを経験しており、利用者が事業所で最期を迎えたいと希望される場合、家族、医療機関と連携をとり、随時報告を行って対応されている。職員の看取りへの経験も大きなことと考えている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時の対応については「緊急時連絡体制図」に定めているところであるが、応急手当や初期対応等の訓練は出来ておらず、今後備えなければならない。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	東日本大震災の折には建物は浸水により全壊したが、地域住民や職員の協力で全員が無事避難されたことは常日頃避難訓練をしていた結果の表れと思ひ、今後も地域の協力のもとその体制を築くものである。	事業所独自に何度か訓練を実施した他、仮設団地全体の訓練に参加している。災害が発生した際の職員の意識、法人、事業所の方針や、その対策について対応が検討されている。法人が作成したホーム用の消防計画や、避難マニュアル、災害対応マニュアルが用意されている。	大きな災害を体験し、災害への対応について意識されているところであるが、事業所内から外部の安全な場所への避難経路の確保、災害時の備蓄品の用意など、改めてご検討をいただきたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	「ゆったり・楽しく・その人らしく」を理念に、日々の暮らしの中で個々の人格等を受け入れながら、入浴の支援やトイレ誘導、食事の声掛け、外出支援などに努めている。	学習会、勉強会を定期的に行っている。日々の生活での馴れ合いはプライバシーを意識するきっかけになると考えられており、自分がしてほしい事はない。相手を自分に置き換えて考え、常に利用者の感情にふれて行動することを意識している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	食事作りなどの家事や外出、余暇活動など、その時々々の場面において個々に働きかけ、自己決定ができるように努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	「ゆったり、たのしく、その人らしく」を理念に掲げており、日々の暮らしの中で何をしたいのか、またその方のペースに合わせた支援に努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	高齢者の方の日常生活の中では「おしゃれ」の習慣はほとんどなく、定期的な散髪や敬老会などの行事で化粧する程度であり、身だしなみについては一部であるが職員と一緒に探しながら着る程度となっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	重度化の進む中で、個々に出来ることを把握し、共に楽しみながら買い物や食事作り、片付けなどを行っている。また味噌汁など食べれない方には小皿に盛りつけるなど、食べてもらうための工夫をしている。	献立はその日の当番の職員が、過日数日分の食事と同じものにならないように作成している。作成した献立は、法人内の管理栄養士により内容を確認されている。利用者から食べたい物を聞き取って取り入れたり、季節に応じた食材を使っている。食べにくい食材は、食べやすくして提供されている。(正月のもちなど)	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	良く動く方、じっとされてあまり動かない方、男性の方などそれぞれに合わせて食事の量を調節したり、水分食事チェックで確認している。また定期的に管理栄養士に「食事摂取内容」を見てもらい、栄養のバランスなどの確認をしながら支援に努めている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	一部ではあるが毎食後に入れ歯を洗ったり、ガーゼで口腔内を拭き取ったり、お茶うがい等でケアに繋げている。また夕食後は全員が入歯洗浄やうがい等で清潔保持に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	その方の状態にもよるが、基本的には定期的なトイレ誘導で排泄を促しその行為に及んでいる。排泄表を把握しトイレ誘導での排便や下剤による排便で支援している。	排泄チェック表を用いて、個別に時間毎に記録されている。トイレでの排泄を基本としており、定期的な誘導が行われている。自力でトイレを使用できる方もいるが、衛生の保持のため使用後は職員がチェックするようにしている他、パットの確認など、利用者の身だしなみや清潔にも気を付けている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	一部本人希望により処方されている下剤を服用しているが、全般には管理栄養士の指導の下、一日に一回は乳製品を取り入れたり食物繊維の入っている食べ物を提供するなど工夫している。また散歩や日光浴なども務めて行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	殆どの方は入浴への声掛けにスムーズに入られており、時には音楽を聴いてもらいながら入浴をしている。またなかなか入りたがらない方には、「今日は入浴の日です」、「〇〇時になったら迎えに来ます」などと、前もって話しておいたり、着替えの服を見てもらう等で入浴できるように努めている。入浴日は曜日が決まっているが、汚れた場合は常に入浴できるように支援している。	月火金を入浴日としており、午前中から全員が入浴している。入浴を拒否する方はいないが、予め入浴することを話しておき、突然入浴とはしないようにしている。また、汚れてしまった場合は随時洗い流している。常に利用者視点での思いで支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	特に昼食後などには「眠気」を催すため、それぞれがテーブルや居室、ソファなどで、枕やクッション、座布団などを使用して気持ちよく仮眠できるように支援している。また日中において疲れた時などは居室にて休息できるように支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	一人ひとりの病状や処方されている薬等を把握し、誤薬にならないよう支援に努め、また変化等については受診時や電話などで医師に相談するなどしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日々の生活の中で、個々の能力に応じて役割を持って頂き、それぞれが楽しみごとや気分転換に繋がるような支援ができるように努めている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	事業計画においては週一回はドライブで外出できるように計画している。また日常的にも時間があれば外へ散歩する機会を設けるなどしているが、出たがらない方もいる。買い物などでは車で出かけ、ついでに近くを散策したり気分転換を図るなどしているが、家族や地域との協力の外出については実施できていない。	利用者の高齢化や重度化等によりあまり外出を希望しない傾向であるが、出来るだけ外出するようにしている。天気がよい日は仮設団地の周囲を散歩したり、買物に出かけている。事業所の車を利用して墓参りや元朝参り、紅葉見物のドライブなどに出かけている。	

岩手県 認知症対応型共同生活介護 認知症高齢者グループホームさんりく

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	買い物に行った際には本人の小遣いを予め渡して支払いの支援に努めているが、お金の所持については事業所管理としており、希望があれば所持できるよう支援したいと思っている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	一部ではあるが家族に電話しているが手紙のやり取りは行っておらず、年賀などの支援に留まっている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	仮設住居であり設備や居住空間など不備な点はあるが、入居者にとってはここを住まいと捉え、職員も混乱が生じないよう安心して生活できる支援に努めている。	玄関から入ってすぐにリビング兼食堂の共用空間があり、大きなテーブル二つを中心にしてテレビや洗面台が配置されている。仮設住宅という狭いような印象があるが、不便はない程度の広さが確保されている。エアコンが完備されており、寒さ、暑さにも対応できる。壁面には利用者の作品や、記念の写真が飾られていた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	施設の奥にはリビングルームがあるが、使用はされてなく、個室での気の合った同市の居場所はできている。また個々に居室やデッキ、ソファなどの誘導でゆったりと過ごせる居場所づくりに努めている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	以前までは馴染みの物を持ちこんで生活に及んでいたが、津波での流出後は特定の方のみ人形を持ち込んで安定に繋げている。今後とも家族等と話し合いながら、居心地良い暮らしづくりをしていきたい。	洗面台、ベット、タンス、エアコンが設置されている。個人の持ち込みはあまり多くはみられなかったが、特に規制はない。居室で仲がよい利用者同士で談笑されている姿がみられた。居室の設備も十分に整っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	建物全体は仮設の施設であり、シンプルな作りがベースとなっている。入居者においては随時ミーティング時等で話し合い、安全、安心に繋げるよう生活の支援に努めている。		